

歯科矯正学分野

教授 齋藤 功

はじめに

新潟大学歯学部が創立した1965年（昭和40年）から遅れること3年、1968年（昭和43年）4月1日に歯科矯正学講座および歯学部附属病院においては矯正科が設置されました。したがって、当分野は今年で講座、診療室ともに満48歳を迎えました。

歯科矯正学分野は、初代福原達郎教授（現昭和大学名誉教授）、二代目花田晃治教授（現新潟大学名誉教授）両先生方のご指導の下で歩みをはじめるとともに基盤を築き、2004年（平成16年）10月1日、三代目として私が教授を拝命しました。当分野は開設当初より、何事にも好奇心を示し能動的に研究も臨床も実践していくことを基本としてきましたので、その伝統を重んじながら教育、研究、診療およびそれらをとおした社会貢献をバランスよく推進したいと考え取り組んできました。2016年4月1日現在の当分野所属常勤スタッフは30名、その内訳は教員8名、医員6名、教務補佐員1名、大学院生15名（米国留学中1名、留学生1名を含む）です。本稿では、当分野における研究、教育、診療の現況について概説いたします。

研究と大学院生教育

矯正治療は新たな形を創り出す行為で、いわゆる動的治療を完遂するには長期間を要します。適確な分析・診断の下で治療を提供すれば治療終了後に著しい変化は生じませんが、時に予測を超えた変化を示す症例に遭遇します。地道な取り組みではありますが、「患者－矯正歯科医間」あるいは「一般歯科医－矯正歯科医間」での信頼関係の構築には治療後の長期安定性についての臨床研究が不可欠と考え、矯正単独治療後、外科的矯正治療後および歯の自家移植を併用した矯正治療後の長期経過について多くの研究成果を挙げ、矯正治療の信頼向上に寄与してきたと自負しています。

学際的・集学的対応が必要な顎変形症あるいは

口唇口蓋裂症例について、口腔外科をはじめとする関連分野のご支援とご協力を得て形態と機能両面から様々な臨床研究を行ってきました。外科的矯正治療を適用する顎変形症患者では、約8割が治療動機の一つとして顔貌の改善を挙げています。したがって、分析・診断にあたっては顎矯正手術に伴う硬組織の移動により顔貌の改善がどう図られるかを十分に把握することが必要です。我々は、術前のCT画像を用いて手術による硬組織移動量と軟組織移動量との比率（追従率）の算出、顔面規格写真を用いた手術方法の違いと顔貌非対称の改善様相の違いなどを分析し公表しています。また、顎顔面の構造的非対称の成り立ちや適応変化の解明を目的に、有限要素法を利用し顎骨内における歪みの分布様相について三次元解析を行っています。さらに、視覚的・客観的データの提供が不十分であった形態と機能との関連に係わる研究にも取り組みはじめています。骨格性下顎前突症患者を対象として、嚥下時関連筋群の活動様相と治療による変化、あるいは嚥下時舌圧様相を個性正常咬合者と比較した結果を公表しています。機能面での研究成果は、構造的不調和や改善に対する機能的適応性の把握、さらには治療後の形態的安定における機能の関与を解明できると期待しています。

当分野への新入医局員は、歯科臨床研修修了後原則大学院生として入局します。2004年10月以降、今年3月までに40名（一般入学31名、国費留学生7名、社会人特別選抜2名）の先生方が大学院を修了し学位を取得しました。大学院で履修する意義は、受動的学習が主体であった大学までの生活から脱却し、自ら探求したいテーマの発見、試行錯誤しながら研究データの収集と解析を行って結果を導き、考察まで到達することにあると考えます。大学院における学位取得までの過程は、毎日が応用の連続である矯正臨床と密接に関係し

ています。自分で状況を把握し、すべきことを決断していく能力の涵養には大学院での研究体験が必ず役に立つと信じ教育を提供しています。

一方、当診療科は（公社）日本矯正歯科学会（以下、日矯学会）が認定した基本研修・臨床研修機関です。日矯学会が定める到達目標に準じて矯正臨床教育システムを構築し、基本的知識と技能ならびに倫理観を具備する日矯学会認定医の育成を目指しています。我々の分野では、治療に対する基本コンセプト、治療ゴールの設定が指導医間で大きく異ならず、チューター制度を基本としてはいるものの臨床の疑問は誰にでも聞ける環境になっています。入局5年目までは、担当する全症例を症例検討会に提示して様々な示唆を受けた後、診断に臨みます。治療開始後は10か月、20か月で症例の進捗状況についてチェックを受け、自己評価を行うとともに予後の把握能力を高めます。認定医申請基準を満たした段階で指導医による症例評価審査を受け、合格すれば認定医を申請します。これまで19名が日矯学会認定医審査を受験し全員合格しています。評価結果が公表されるようになった最近3年間でみると、6割が最高評価を獲得し、審査員より新潟大学で研鑽を積んだ申請者の提出症例は質が高いとの評価を受けています。適切な矯正治療を提供できる認定医を輩出できるよう、引き続き所属する指導医の先生方とともに尽力する所存です。

矯正歯科臨床の現状

当診療科における最近5年間の年間新規登録患者数は平均約280名で、他院からの紹介患者数も増加傾向を示します。また、人口構造の変化とそれに伴う社会ニーズの多様性により矯正治療を希望する成人患者の割合は上昇し、直近15年間（2000年～2014年）における20歳以上の成人患者の割合は平均31.9%に達しています。上述した、顎変形症患者の割合も全登録患者の約20%に達しています。また、当科における30年間の臨床統計調査により、口唇口蓋裂患者については新潟県内で出生した患児のおよそ70%が来院していると推定され、新潟地域の拠点病院として治療・管理を担っていることが明らかになりました。これらの状況は、口腔外科、予防歯科、小児歯科、言語治

療室をはじめとした他診療科（室）のご協力によりチームアプローチが有効機能している一つの証であると考えます。

矯正治療の戦略性拡充が期待される、骨を固定源とした歯科矯正用アンカースクリューや矯正用インプラントアンカー（仮称）が普及し適用されるようになってきています。当診療科でも14年ほど前より導入し、適応症を十分検討した上で利用しています。より質の高い治療を提供するために新しい治療手段を取り入れつつも、同時に有効性を真摯に検証していきたいと考えています。

以上、分野における研究、教育および診療の現状について概説しました。明るく活動的な医局の雰囲気を持しながら、これまで蓄積してきた基本的かつ実践的概念と若手の柔軟な発想とを融合させながら新たな視点でテーマを発掘し、歯科矯正学および矯正臨床の背景にある隠された真実の解明に向けさらなる追究を続けていく所存です。今後とも当分野へのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

歯科矯正学分野構成員（常勤）名簿（2016年5月20日現在）

教授：齋藤 功、准教授：森田修一

講師：八巻正樹、助教：福井忠雄、竹山雅規、山添加奈子、丹原 惇、高橋功次朗

医員：大竹正紀、井表千馨、坂上 馨、西野和臣、大倉麻里子、眞舘幸平

教務補佐員：佐藤知弥子、大学院生：大森裕子、上村藍太郎、北見公平、阿部 遼、中田樹里、新島綾子、村上智子、網谷季莉子、市川佳弥、栗原加奈子、藤田 瑛、大澤知朗、深町直哉、水越優、Supaluk Trakanant

